

一般演題

第2回平戸度島住民検診におけるマイボーム腺機能不全の有病率

Prevalence of Meibomian Gland Dysfunction in the 2025 Hirado-Takushima Study

福岡 詩麻 (ふくおかしま)¹

¹LIME研究会

【目的】我々は2017年平戸度島検診により、マイボーム腺機能不全(MGD)の有病率は32.9%で、40歳以上では40.1%だったと報告した。今回、6歳以上の全島民を対象とした2回目の疫学調査に基づき、MGDの有病率を報告する。

【対象と方法】対象は6~94歳(平均60.3±23.9歳)の島民242名(男性93名、女性149名)。分泌減少型MGD診断は、MGDワーキンググループによる2010年版診断基準(症状、瞼縁所見、plugging、マイバム異常すべてあり)(前基準)とMGD診療ガイドラインによる2023年版診断基準(症状あり、かつpluggingもしくはマイバム異常あり)(新基準)を用いて、対象者全体と40歳以上(199名)のMGD有病率を求めた。MGDのサブタイプとして、症状とfoamingありでマイバム分泌低下なしを分泌増加型MGD、症状はないがpluggingかマイバム異常ありをAsymptomatic MGD、瞼縁所見やpluggingなしでマイバム異常ありをNonobvious MGD (NOMGD)とした。

【結果】分泌減少型MGD有病率は、全体では前基準で50.4% (122名)、新基準で83.5% (202名)、40歳以上では前基準で60.8% (121名)、新基準で93.5% (186名)で、新基準のほうが高値だった(各 $P<0.001$)。サブタイプ別の有病率は、分泌増加型MGD 2.1% (5名)、Asymptomatic MGD 8.3% (20名)、NOMGD 1.7% (4名)だった。

【結論】2025年に平戸度島検診を受けた島民のうち、前基準で5割、新基準で8割を分泌減少型MGDと診断した。前基準よりも新基準のほうがMGD有病率が高値だった。

【利益相反公表基準】該当無

【倫理審査】承認番号取得済

【動物実験委員会】該当無

【IC】取得有

【VIP演題応募の希望】希望あり

【アピールポイント】既報とは検討項目が異なる、新知見が得られた、その他(日本での2回目のマイボーム腺機能不全に対する疫学調査を行い、MGD有病率を前・新診断基準で比較した。)